



TITLE:

<批評・紹介>永積昭編 東南アジア の留學生と民族主義運動

AUTHOR(S):

土屋, 健治

CITATION:

土屋, 健治. <批評・紹介>永積昭編 東南アジアの留學生と民族主義運動.
東洋史研究 1983, 42(2): 353-360

ISSUE DATE:

1983-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153892>

RIGHT:

すべきか。それが封建制だとすれば、そもそも封建制とはいかなる範疇のものと規定すべきか。古典的ブルジョア革命が否定しなかった地主制を中國の農業革命が否定しなければならなかったとすれば、なぜその中國の地主制が封建制であり、農業革命がブルジョア革命なのか。このような問題の立て方は、何をいまだらわかりきったことをと言われそうであるが、實態のもっと豊富な解明とあいまって、歴史發展の法則的理解の内容を豊かにしていくひとつの手掛りとなるのではないだろうか。

第二は、帝國主義の半植民地的支配と舊中國の農村經濟體制の構造的連關とその變革の問題である。この問題はグローバルな世界資本主義の構造的把握の課題につながっていき、また逆にそこから方法的示唆をうけとるものではないだろうか。

第三は、舊中國の特異な農村經濟體制と、それに規定された特異な農業革命の歴史が、その後の社會主義建設といかにかわつていったか、この歴史的連關をとらえる方法的枠組みをもっと精緻なものとしていく必要はないか、という問題である。これは歴史研究と現代研究の斷絶を克服するために、是非議論を期待したいことである。

著者の筆の運びはそのような點について禁欲的であるが、本書はこのような學問的刺激を與えてくれるし、またそのようなものとして、著者のあとを追う研究者に確かな足掛りを與えてくれる意味でも、大きな學問的業績である。

一九八二年一月 東京
研文出版 A5版 三六七頁

永積 昭編

東南アジアの留學生と民族主義運動

土屋 健 治

一

本書の題名は、正確に書くと、山本達郎・衛藤藩吉監修「叢書・アジアにおける文化摩擦」、永積昭編『東南アジアの留學生と民族主義運動』である。このような形で本書が成立した経緯は冒頭の「監修のことば」（衛藤藩吉）で簡潔に示されている。

すなわち、「……異質の文化が接觸したときに生起するいざこざを假に文化摩擦と總稱し、これの分析に關心をもつ經濟學者、政治學者、文化人類學者、社會學者、精神病理學者、歴史學者らがあつまつて、國際基督教大學の山本達郎教授を中心に、一つの研究チームができた。……當面、東アジア及び東南アジアに對象を局限して、一九七六年春から研究を開始した。幸いに一九七七年度から文部省の特定研究に取りあげられたので、組織を擴大し、最終的には諸分野の研究者十七チーム延べ百六十名を集めて頻繁に研究會を開いた。七八年二月一、二兩日には、東京グランドホテルにおいて、問題提起のための國際シンポジウムを開催した。その成果は『日本をめぐる文化摩擦』（弘文堂、一九八〇年刊）として公刊された。翌年、翌々年にも參加者全員によるシンポジウムを催した。本書はこのようなして遂行された特定研究の成果の一部である。

……」

本書はこれのようにして刊行された叢書の第一冊目であり、永積昭を研究代表者とする「文化の傳播と摩擦——東南アジア——」班の研究活動の成果が本書に於いて結實したものである（永積昭「あとがき」による）。この班の名稱と本書の題名である「東南アジアの留學生と民族主義運動」との相異についての説明はとくに明示されていないが、「文化の傳播と摩擦」という命題を東南アジアという現實の場で翻譯すれば「留學生と民族主義運動」として表出されること、また、各々の研究参加者の専攻と選好とがこの問題に歸着していったことが推察される。すなわち本書は、文化摩擦、留學生、民族主義運動という三つの基軸をめぐって編まれているのである。

二

ここで本書の構成と各論文の大意をみてみよう。構成は次の通りである。

東アジアおよび東南アジアに於ける社會進化論の系譜

……永積 昭（一〇五九頁）

タイの一九三二年立憲革命——海外留學經驗者の理想と現實——

……市川健二郎（六一一—一〇四頁）

シンガポール華人改革指導者、林文慶と文化摩擦

……明石陽至（一〇五—一四一頁）

フィリピン民族思想の創出とプロバガンダ運動

……池端雪浦（一四三—一九六頁）

コンバウン時代のビルマ留學生

……大野徹（一九七—二二七頁）
東遊運動期のファン・ボイ・チャウ——渡日から日・中革命家との交流まで——
……白石昌也（二二九—三二〇頁）

右の六つの論稿は章別に編成されているわけではないが、冒頭の永積論文が「社會進化論の系譜」という主題をめぐって日本、朝鮮、中國、シンガポール、ジャワの複数の地域を視野に収め、これに對して以下の五論稿が各地域を専門的に扱うという體裁をとっている。そのうち、明石論文、白石論文では永積論文に現れた人物についてとくに詳しく論じているので、一應、この三論文をセットとして考えることもできる。しかし、當然のことながら、各執筆者の視點や方法、表現のスタイルは各々に異なり、また、論稿の分量も區々であるから、本書は、先に述べた三つの基軸をめぐって各々に展開される獨立の論稿の集成という方がより適切であろう。その意味で、制度的には共同研究として成立しながら、内容的にはあくまでも「學問研究は一人でやるもの」という編者の「若い頃の偏見」（編者の「あとがき」による。ただし、「偏見」とは編者の軋海であろう）が、つらぬかれていることに、むしろ賛意を表したい。

先ず永積論文は、一、問題の所在、二、東アジアの場合、1、明治初期の日本、2、併合以前の朝鮮、3、清末から民國初期までの中國、三、東南アジアの場合、1、ウエトナム、2、東南アジア華人社會、(一)シンガポールの場合、(二)ジャワの場合、3、ブディ・ウトモに於ける「生存競争」、4、インドネシアに於ける種族主義と生存競争、四、社會進化論の衰退、1、漢字文明圏と社會進化論、

2、社會進化論の終末、という構成で、四節9項からなる。

この「社會進化論」Social Darwinism の「アジア各地における受容の種々相」が「社會進化論の傳播の有無が、社會主義思想の受容に對して何らかの相異となつて現われはしなかつたか」(五頁)という動機によつて取り上げられる。先ず明治初期の日本の項では、「優勝劣敗」、「適者生存」という文脈において、ダーウィンの進化論、スペンサーの社會進化論が受容されていく狀況が、山路愛山、加藤弘之、エドワード・シルヴェスター・モースらの當事者に即して略述される。「考え様によつては、明治維新以來一九四五年に至るまで、日本を支配し續けた最も有力なイデオロギーは、社會進化論の應用としての富國強兵思想であつたとも言えるのではなからうか」(九頁)というのがここの暫定的な結論である。次いで併合以前の朝鮮の項では「李朝末の朝鮮から日本に留學し、更に朝鮮人として最初のアメリカ留學生となつた俞吉潸(ユ・キルチュン)」(一〇頁)をとり上げ、福澤諭吉やモースの薰陶を受けた俞が進化論にふれ社會進化論的な思考法を身につけたこと、しかるに、日本の日韓併合を機に「反日論者となつていくのみならず、「國上ニ國ナク國下ニ國ナシ」と記すように「社會進化論に對する秘められた拒絶反應」(一二頁)が見られること、が示される。清末民初の中國の項では、「清末の思想家で、西洋の名著の翻譯者として知られる嚴復」(一二頁)と變法派の領袖・康有爲の弟子で「清末の變法派イデオログの代表者の一人であつた梁啓超」(一二頁)が考察の對象としてとりあげられる。イギリスに留學してスペンサーの思想に觸れた嚴復は「本書(トマス・ハックスリーの『進化と倫理』の中國語譯『天演論』)を材料として、スペンサーの思想をわ

かりやすく中國の讀書人に紹介した點」にその眞價があつたが、

「しかもその際に、スペンサーの思想體系の根柢にある強烈な個人主義・自由主義的傾向は清末社會の文脈に合ふぬものとして薄められ、弱められて、日本の場合と同様、その富國強兵的な應用面が増幅されることになつた」(一四頁)と指摘されている。一方、一八九八年に日本へ亡命した梁啓超は、福澤諭吉、加藤弘之、徳富蘇峰、中村正直、矢野龍溪らの思想にふれており、「脱亞入歐」的社會進化論の影響を受けた。さて第三項では、ヴェトナムのファン・ボイチャウ(潘佩珠)、シンガポールの林文慶及び宋旺相における社會進化論の受容のされ方が考察されたのち、同様の視點(「西體中用」)からジャワの中華會館の活動がとりあげられている。さらに目を轉じてジャワ人知識人の思想に至ると「日本や中國を經由しない別系統の進化論思想の流入を考へることができ」(二三頁)。そこでは、オランダ語經由で「生存競争」de strijd om het bestaan の概念が一旦は受容されているものの、これはやがて、「調和ある發展」de harmonische ontwikkeling というジャワ流の文言のうちに解消される。ここでは「社會進化論への……警戒心」(二三頁)がより強く表明されていることが指摘される。最後の四節では、先ず、漢字文明圏において社會進化論の受容が直接的かつ顯著であつたことについて、一、讀書人階層の知的水準が高く新しい思想を消化する能力を備えていた上に、彼等が「士大夫」として國家の存亡に自己の運命を託していたこと、二、國家權力と宗教的權力とは概して切り離されており、國際政治に於ける對應の仕方が一般に世俗的であつたこと、三、歴史についての關心が深く、反覆せぬ一度限りの事象はそれ自體記述に値するという「史書の國」である

ことによって、時間の推移の中で社會進化論を理解する、という素地が存在していたことが指摘されている（四三—四四頁）。次いで、社會進化論の終末の項では、丘淺次郎『猿の群から共和國まで』という題名に注目して、社會進化論が日本にもたらした衝撃とその終末が語られる。

以上、論稿の素描としても不十分であるが、ここでは、社會進化論の受容をテーマとして日本、朝鮮、中國、シンガポール、ジャワの一九世紀末から二〇世紀初めに至る知識人の存在様式が手際良くまとめられている。

明石論文は、右のうち、とくに林文慶について論じている。まえがき以下、一、留學——改革思想形成の背景、二、林文慶の社會改革思想、三、林文慶の政治的革新思想、四、結論、からなる本稿は、「三つの祖國——英國、シンガポール、中國——にまたがる生涯」（一三一頁）を終えた主人公の略歴、思想、改革運動がまとめられているが、その要約は結論中の次の一節につづいている。「合理的西洋科學・知識と中國の道德文化の融合こそが華人社會の近代化であり、中國の生存の道であると文慶は主張し、その努力に彼は盡力を惜しまなかった。この意味で文慶の革新思想を形成した異文化との遭遇はネガティブな文化摩擦ではなく、ポジティブな文化變容であった。彼の思想には常に中・西兩文化が併居しており、その文化摩擦と兩文化を超越した博愛心で調節、融合していた。……文慶は西洋、東洋兩社會からも離開することなく、眞のメトロポリタンの近代人として生涯を全うした。彼くらい文化摩擦を活用し、兩文化の長所を兼備し、終始一貫した信念を持った改革指導者は少いであろう。（一三五頁）論稿のトーンは林文慶の顯貴と稱揚である。な

お、細部にわたるが、林文慶の「我々の敵」の十の基準（一二〇頁）と、同じ箇所を扱った永積論稿（二四—二五頁）との譯語の相異が氣になる（特に第六項目の「シイオソフイー」と第七項目の文言）。

一方、本書の最後に掲載されている白石論文は、永積論文でふれられたヴェトナムのファン・ボイ・チャウの滯日経験（一九〇五—〇九年の四年間）に焦點をあてて、懇切・周到に論じたもので、本書中もつとも分量も多く八〇ページをこえて全體の四分の一強に及んでいる。一、渡日（一、生い立ち、二、渡日の目的——武器の入手、三、東遊運動の開始）二、渡日前後の状況認識（一、「同文同種同州」、二、社會ダーウィニズム、三、文明進歩史観）三、日本への失望（一、「東亞同盟會」と『滇桂越連盟會』、二、雲南省學生との交流、三、日・中無政府主義者との交流、四、日本への失望）、結論、認識の變化、という本稿の構成からもうかがえるように、主人公に関する研究史の蓄積を着實におさえながら彼の行動と思想を跡づける一方、「文明進歩史観」を中心にして、先の永積論文の骨子を一層緻密に展開している。その點で、これは本書中、永積論文とつとも良く呼應した一對をなすだけでなく、單獨の論文としても目配りのよく行き届いた、そしてその意味で、讀者にはもつとも親切的な論稿である。それとは別に、ファン・ボイ・チャウの日本政府要人（大隈重信や小林壽太郎）に對する「態度が實に堂々としている」（二四五頁）點を委曲を盡して論じている點で、本稿は讀者の胸を打つものがある。

さて、残りの三論文は、扱われた對象からみて獨立の論稿としての性格を一層きわだたせている。このうち、タイを扱った市川論文

は、緒言と結語をはさんで四節からなる（各節の標題はない）。緒言では、タイが絶対君主制から立憲君主制に移行した一九三二年立憲革命を『海外留學経験者の理想と現實』という角度から、問題の再考察を試み、歐米諸國とは異質なタイの軟弱地盤の政治風土（political nature）の中で、外國留學経験者が歸國後に傳統と近代との谷間にあって、かれら自身の途をどのように開拓していったかという疑問に對して應える」（六四頁）という問題設定とそのための方法が提示される。一では、タイ王族の留學経験がタイ王室の政治過程の文脈の中で整理され、二では、一八九六年の王室奨學金（*King's scholarship*）の設定以降、平民子弟の中で留學の機會をえ、三二年革命で重要な役割を演じた、ブリディ、ネーブ、チュア、シリラート、プラユーン、ビブン、タスナーイ七名の來歴、彼らが一九二七年二月パリで人民黨を結成する経緯、結成後のブリディ中心の文官グループ、ビブン中心の武官グループのそれぞれのその後の経過が、筆者の現地（ヨーロッパ）調査の成果をまじえて整理され、「パリで發足した人民黨の理想と革命前の準備段階の現實との間にはかなりの距離があったこと、文官と武官の雙方の内情をみると、革命に對する各人各様の思惑が入り亂れており、從來の所說のように文官派と武官派、長老派と青年派、フランス留學派とその他諸國留學派などの分類方法が事實と相違していること、および人民黨が政策集團でなく、數人の指導者によつて別箇に組織され、革命作業を分擔した集合體となつたこと、」（八二頁）が要約され、さらに、このようにして、「十分な統一見解がまとまらないままに革命が實行に移された點で、……革命受諾に對する國王の判斷に混亂を生む結果を招いた」（八二頁）ことが指摘される。三では、「シヤム共產黨が立

憲革命についてのなんらの役割りも果たしていない點」（八三頁）が確認されたのち、四では、立憲革命をめぐる政治過程が先に指摘された「革命受諾」を中心に論じられる。そこでは、「哲學者としての國王（ラーマ七世）の弱性格」（九一頁）と、「王都における新舊政治權力の抗争」（九五～九六頁）が主要なモチーフである。そして「立憲革命をめぐる新舊兩勢力の代表者達の多くは西歐留學経験者であり、かれらは西歐民主主義の理想を、祖國の傳統的社會構造の中で、どのように實現できるかという難問題と取組んできた。いわば、上意下達と下意上達の政治體制を兩極端におく距離の中間點のいづれに傾いた立場を選択するかについて、新舊兩權力の間で、また兩權力の内部で對立をくりかえしてきた」（九六頁）という當時の政治狀況の基本的な構圖が、結語において提示されている。

このように、市川論文は「文化」及び「文化摩擦」の問題よりも、留學生を核とする政治勢力間の政治力學に焦點を絞っている。

ビルマを論じた大野論文は、コンバウン時代のビルマ人留學生に關する情報を、能う限り提供するという性格を示している。一、時代的背景、二、留學生派遣の動機、三、ビルマ人留學生の派遣先、人數および派遣目的、四、留學先での研修狀況、五、留學生の歸國後の活動、の五節からなる本稿は、一、二でコンバウン朝末期の苦惱が王朝を中心に略述され、三以下では、その時期の留學生（確定された數字として、フランス二四名、イタリー一三名、イギリス三名、インド二三名）についての資料の提供についてやされている。

「こうした留學生の存在にも拘らず、ビルマは一八八五年に……獨立を喪失した。留學生の……大半は英領植民地となつたばかりの

ビルマへ歸國した。しかしそこには、彼らを迎え受け入れてくれる機構も制度も残っていなかった。歸國後の彼らの姿を伝えてくれる資料は、遺憾ながら何一つ残っていない。王朝制ビルマから英領植民地へと變轉していく激動の歴史の中に、彼らの姿もまた埋没し去ったのである」(二三頁。本稿の結句)という状況であるからこそ、本稿で書き留められた情報は、たとえ不完全であるにせよ、貴重であるばかりでなく、なまなかの解釋や分析をこえる重さをもっている、といえるかもしれない。

フィリピンを扱う池端論文は、かつきりとした骨格をもつ論稿である。一、フィリピン民族思想の二つの源流では、研究史を踏まえた上での清新な問題設定、すなわち、「プロバガンダ運動は、フィリピンの土着的な——従ってそれは一般民衆の裡に存在した——意味世界と、どのような関わりをもつものであったのか」(一五一頁)が設定され、そのためにM・H・デル・ピラールとJ・リサールの思想的營爲に焦點が絞られることが明示される。「意味世界」と「思想的營爲」というタームを通して、「了解の構造」としての文化と文化の對峙する状況が豫告されるのである。二、スペイン留學生のプロバガンダ運動では、その極點に立つリサールの『ノリ・メ・タン・ヘレ』(一八八七年出版)に焦點が合せられ、そこから、「フィリピンの風土への讃歌、言いかえれば、フィリピンの美しい自然の懷で展開される生の喜び」(一五六頁)というモチーフとda mayというタガログ語にこめられる「ともに關わり、ともに感じ」そしてその實踐として死んでいく(一五七頁)というモチーフの二つのモチーフが抽出されている。なかでも、「この國のために死ぬ」(一五七頁)というモチーフの抽出はまことに重要である。な

ぜならそれは民族主義の精髓だからである。三、プリンスパーリアの改革運動では、對象は一轉してフィリピン在住のデル・ピラールに移される。『タガログ毎日』の創刊(一八八二年)を機に言論活動に着手したデル・ピラールが「タガログ語の傳統的表现を用いつつ、新しい價值と意味の世界を説いた」(一六一頁)経緯が明らかにされる。四、リサールとデル・ピラールは、一八八八年にフィリピンをたち翌年バルセロナに到着した當時のデル・ピラールの作品や書簡に先ず焦點が合せられる。なかでも、書簡中の次の文言は、「ここ」對「あそこ」、「此岸」對「彼岸」の非和解的對峙に關する、

そして、およそ民族主義をつらぬく生理的な原形質に關する、一瞬の啓示であり全面的な開示である。再引用する誘惑をたちがたい。ここ(スペイン)は歡喜の土地だと言われていますが、それは人工的な感性の中にだけあることだと思えます。ここではすべてがひよで貧弱です。太陽には熱氣がありませんし、空には星がありません。月には輝きがなく、畑は瘠せています。花々には香りがなく、雨が降る時もアトム(雨)の滴になつて落ちてきます。すべてが著しい對照をなしているので、わたしたちの搖籃の地にたゆたう、力強い自然の壯麗なる表出に思いをいたさないではいられません。そこでは、あの青い空は星々で飾られ、この季節には月が輝きわたり、熱帶の太陽は燃えるような光をふり注ぎ、田園は青々と繁茂し、花々は芳しい香りを撒きちらしています。そしてなにかなく、わたしたち東洋人の生活慣習がもつ優しさと誠實さと懇ろな心配り。それらはわたしの腦裡に美しい感動にみちた追憶を惹き起します。そして、神の與え賜うたこの幸が、神の司祭となつた人々の不信仰によつて曇らされていることに思いをいた

し、誤せすにはいられません。

右の文言は後代から見ると「決り文句」の羅列のようにみえる。しかし重要なのはまさにその點であり、民族思想の成立とはこのような「決り文句」の様式性において自他を峻別していくことにほかならないのである。同様の例をたとえばわれわれはジャワのカルテイー（一八八〇—一九〇四）の書簡の裡に、ほとんど寸分違わぬ形で見出すことができる。

さてデル・ピラールのその後の軌跡はプロバガンダ運動の機關誌『團結 La Solidaridad』（一八八九—一九〇五年）を中心に展開された言論活動を通して追跡されている。一方、リサルは、時期を同じくして再びスペインに戻っていたが、デル・ピラールと異なつてスペイン政府に對するいかなる幻想も抱いていなかった。彼の著作活動は直接フィリピン人に向けて行われ三種の「歴史的著作」と第二の小説『フィリ（反逆）』を通して、フィリピンの分離獨立という思想に到達する経緯が筆者によつて説得的に展開されている。

五、プロバガンダ運動の終末は、九一年にふたたび歸國の途につくりサルから筆がおこされる。ここでは、スペイン語とタガログ語という二重言語状況で苦惱するリサル（「母語」としてのスペイン語對「讀み手」の言語であるタガログ語）の姿が描かれる。一方、リサルと訣別した後のデル・ピラールも經濟的苦窮に立つ。「最後の力をふり絞るよう」にして『團結』誌に力を注ぐピラールはついにフィリピンに歸還することなく客死する。

リサルもデル・ピラールも、民族主義の先達でありながら、ついに、タガログ語の世界のなかにその思想を文脈化することはできなかったこと、彼らの思想を民衆の中に生きるパシオン（キリス

ト受難の長編敘事詩）の文脈に讀みかえていくのは、その後に續くカティブナンの文化的營爲によること、が、「結び」として述べられている。

三

右にみてきた通り、本書を構成する各論稿は各々獨立した性格をもつものとみなされる。加えてまた、たとえば白石、池端兩論文は、それ自體で明解な起承轉結がついているものの、筆者が構想しているもつと大きいフレームのなかで、いずれその所を得ることが豫想されるし、永積論文もまた「社會進化論の傳播の有無と社會主義思想の受容の關連性」という點で、續編が書かれるべき性格のものかもしれない。

従つて本書の全體にかかわるコメントを記すのは困難であるが、いくつかの論稿に關連して興味深く感じたことを以下に記す。

それは、「文化（摩擦）」、「留學生」、「民族主義」という三つの主題をめぐつて論述を展開するうえで主要なファクターになるのは留學生であり、このファクターを中心にすえてこそ、これらの主題がもつとも生き生きとかつ説得的に關連づけられるということである。その場合の留學生はたんに量的に處理されるものでももちろんなく、また、彼（ら）をめぐる政治的・社會的プロセスの記述をもつて終るものでももちろんない。これらは、セッティング（舞臺設定）にすぎない。

たとえていうとここの留學生は旅人である。旅に出かけ旅より戻る旅人自身の編む物語に耳を傾けながら、この旅人をめぐつて展開される物語・その〈運命〉が提示されることを通して、先の三つ

の主題は、はじめて、内的に關連し合うことになる。これは、たんなる比喩でなく、たとえば、ヴァルター・ベンヤミンが「物語作者」について語る次のような文言のうちに、「文化」、「留學生」、「民族主義」の（文化的アプローチにおける）要諦もまた盡くされているといえるであろう。

口から口へと語りつがれる経験は、あらゆる物語作者にとって、汲めどもつきぬ泉であった。……俗に『旅をすればなにか話すことができるもの』という言葉があるが、つまり語り手は遠方からやってくるひとと考えられている。だが、實直な暮しで地方にとどまり、その土地の口碑や傳承に通じているものにも、同じくひとはこのんで耳をかたむける。いま、この二つのグループを太古の代表者の形であらわすとすれば、一方は定住農民に、他方は交易をいとなむ船乗りで、具現されている。じじつ、この兩者の生活圏が、ある程度まで、それぞれ独自の系統の物語作者たちを生みだしてきたといえる。……（しかし）あれだけひろい歴史的な幅をもった物語の王國の廣がりには、これら二つの太古の型のきわめて内密な交流なしには考えられない。このような交流を實現したのは、とりわけ中世における、かの職人憲章であった。定住している親方と遍歴する徒弟とが同じ部屋の中で一緒に仕事をしていたのだし、どんな親方でも、故郷や異郷の地に定住するようになる以前には、みんな旅渡りの職人だったのだ。農民と船乗りが、物語の術の親方だったとすれば、職人階級はその上級學校だったといえよう。遍歴を重ねてきたものが家郷にもち歸る遠い國々の消息と、定住しているものにもっともこのんで打ち明けられる過去の消息とが、この階級によってひとつに結ばれたのである

（ヴァルター・ベンヤミン『物語作者』高木久雄・佐藤康彦譯による）。

「民族主義」がそのかたちを表わすということは、右の二つの「物語の系譜」が「ひとつに結ばれ」ていくことにほかならないであろう（たとえばフィリピンにおいて、プロバガンダ運動の世界がパシオンの世界と一つに結ばれていくというように）。

一方また、「留學生」は、家郷に歸つて異郷の物語を編み、その物語が「上級階級」によって家郷傳來の物語と一つに織り合わされていくだけでない。これらの「留學生」は、このことを通して、異郷の民に對してもまた、異郷の文化を文脈化しそれを提示してみせるのである。白石論文において、ファン・ボー・チャウの日本での態度が「實に堂々としている」ことが指摘されるとき、その理由は、何よりも先ず、この「留學生」が、彼の目に映する近代日本そのものの文脈を、日本に向つて提示してみせた、ということに歸因しているように思われる。

何れにしても、本書で示されたさまざまなケースは、東南アジア近代の知的状況を思索する上で、貴重な情報と興味深い問題提起をいくつも含んでおり、今後、この分野の研究がさらに推進される上での一つの基點となるであろう。

一九八一年十二月 巖南堂書店
A5版 三一五頁